物産雑説

葉菜類
花菜類
香辛類
(七ノ一～三七)

七

葉菜花菜香辛

A 00
5764

東京大学総合図書館

No. 8

小松菜

二十年五月六日 其地ニテ聞ク所

東葛飾郡西小松川村ニ善照寺ト云フ寺アリ（住職）八代将軍屡此地ニ鷹狩セシニ此時此菜ヲ献上セシニ将軍之ヲ献セシ人ヲ尋ネ随テ其名ヲ高クス其跡ニ名ヲ前ニアリシナルベシ其名ニ献セシ処ニ屡アリシ此村ニテ作レル所ノ味殊ニ宜シキハ人ノ知ル所 砂村辺ニテ作レル味ハ今ハ劣レリト云フ 長大ナルモノヲ撰テ直ニ煮ル又アリナカラ宜シ又漬物トスベシ（逆井ノ橋ヨリ東ハ小松川村西ハ亀戸村ナリ）

小松菜ノ春蒔ノ葛菜ト云フ長大尺余ニシテ漬物ニ宜シト云フ

但シ（ウグヒスナ）ノ称ハ春月蒔ク菜ニハ通シテ用フ 此節ヨリ（マナ）蒔ク

一畝ニ春蒔スル菜ヲ始メシハ七八年以来ノ事ナリ 四十把ヲ一束トシ

A00
5764

東京帝國大學圖書

B 45224

男爵田中芳男氏寄贈
先代田中芳男旧蔵書
昭和七年

東京大学総合図書館

夫ヨリ茎高ク丁字ノ形ヲ生ス 近時ハ長大ナルニ至リ右ノ把ヲ以テ
本作リトスヘシ 一本二本ト苗ヲ以テ取扱フナリ
一ツマミナハ葉ヲウロヌクモノナルカ 従来夫ヲ作ル百姓アリ 年中作リ出ス
肥ハ小便ニ水ヲ多ク割リ灌ク位ニテ 又別ニ僅一反位ニシテ収獲ニ蒔
テ搗ニ売ルモノ 蒔テ三日目ニ生シ 十日ニ抜ク 種ハツケナ最佳
小松菜ハ 甲斐菜小松菜ハ十日ナルモノ 又ハ油菜ヲモ用ウ
春ノ蒔ハ十八日位ヲ経テ 又暑中ハ十日位ニ用ユルナリ

タグチナ

群馬縣下上野南勢多郡田口村ノ名産ナルニヨリ田口菜（タグチナ）ト称ス 猶三河島菜 小松菜ニ於ル如シ 此菜ハ小松菜ノ種類ニシテ大ナル差ハナシ 此菜ヲ他地ニテ作ルハ同様ナレドモ 若シ種子ヲ収メ蒔キテハ変シテ甚タ其大ナルトモ 先年駒場農学校ニテ作リシコトアリ 昨年又種ヲ取寄セ作レリトテ 同校舟津氏ヨリ贈ラレシ所ナリ

此菜ノ調理法ハ熱湯ヲ通シ又ハ熱湯ヲ灌キテ後紙ニ掲ケ水ヲ切リ而シテ刻ミ醤油ヲカケ食ス 甚タ切レアリテ剛カラズシテ美ナリ 若シ他菜ノ如ク茹テ又ハ茹テヽ水ニ浸スル時ハ甚タ味ヲ失スルコト甚シ

他業ニ異ナル所ナリト聞ク今其法ニ従ヒ試ムニ果シテ然リ

明治十五年十月五日夜暗燈ノ下ニ記ス　田中芳男

小松茶ノ本文同様ノ法ヲ以テ令ヒ試ムニ味甚タ宜シカラザリシ

十月三日記

清タリ是ハ論ヲ俟ズシテ茶葉ナレド他ニテハ其手ヲ

トテ特産ノ様ニ云ハシ又製茶ニ至テモ大ニ巧ナリ

故ニ此頃横浜清商ノ販賣ス瓜茶ト云フ乾茶

云ん

此茶ハ仮名新芽の下帯

新芽の田口村ニ在る田口茶

と唱ふ甚稀ニ郷語ニ藤

たるあり　用ゆ

満陽に披しい撰候しも

乾菜

凡蔬菜中乾貯スヘキモノ多シト雖モ葉ヲ乾シ貯フルハ救荒ノ為メニ山野ニ自生スル草本ノ嫩葉ヲ乾シテ貯フルノミ リヤウブ ネリナ ニ於ケル如シ 然ルニ培養耕作スル菜蔬ニ至リテハ根茎 芋茎 等ニシテ 葉茎ヲ乾スニ即ヒバト称スル大根ノ葉ヲ乾スニ止マリ 外ニ芋葉位ニシテ其他ハ僅ニ之ヲ見ルノミ 近年上州ニ於テ製スル 凍菜ト云フモノ 世ニ行ハレ時タリ 是ハ塩ヲ凍乾スル菜葉ナレド 他ニ異ナルハ塩ヲ以テ特産ノ様ニ云ハレシ又製法ニ至テモ甚ダ簡ナリ 然ルニ此頃横濱清商ノ販賣スル瓜茎トテフ乾茎

他菜ニ異ナル所アリト聞ク今其ニ製造ノ法ヲ

[illegible]

船[illegible]

二月[illegible]

アリ全ク山東菜ノ葉茎共ニ備テ乾タルモノト見ヘタリ
因テ考フルニ東部ニテモ前述ノ如ク菜ヲ乾カスコトナシトモ亦
此法ニ任セ製セバ剰アルヲ以テ缺乏ノ時ニ用フベキ多キ
ヲ以テ之ヲ他ニ輸スベク腐敗ノ患ナク運搬ノ費ナク
貯蓄ニ便ナル等実ニ簡易ノ良法ト云フベキニ非ラズヤ
備考
凍菜ト称スルハ春府ノ三河島菜ニ限ル白菜トカ
風日ニ曝乾スルニ大低一月ニモテ水分ノ八九分ヲ減シ二分ニ
ニテ全ク乾枯セリ因テ水浸シ置テ試ルニ原ヨリ乾ナ
メルモノナレバ生鮮ニハ及バザレド風味却テ勝テ脆ニ宜カリキ
今ヨリ世上ニ大ニ行フ所アリ

二十年五月二十二日　田芳記

紙儀板

凍乾菜のこと

十八年一月十日の農會雑誌に丹後何某氏の女國上郡にて作りたる凍り乾しの菜若干を送来たれども時候暖かにて無退を用ひずなりし然るに同氏と逢ひ聞くするよし菜を湯中に投して出し凍り乾しにせたるものは何時煮ても柔にて美味なる菜は乾しにしたるは味劣る生菜のめききらぬの菜を以て作らざれば全なるけれども生菜は凍りても乾かずば凍菜の乾すのことなれば氷を質氷霜にてをまでは生菜の氣候にては乾くことなし故に氷菜

高野豆腐を名物名産何々と数へしるす千万なり

附言 抹茶類ハ茶と共に陸に事を慕ふべし 陸に至りては味

取りて何しくなる 其て 茶の陸に至りては味を損ず

なる茶を多くすゝむると好く 飲の損せぬ為

飲の損せぬは凡て一二日を経たるゆゑ陸に一担も

経たる茶を好まば 蒿敗遅し

余輩て聞くる所 凡そ乞の味を 茶を好む

人とせば其の所を好むべし 蒿敗遅しと云ふ

十八年 月 二十五日 田井九

紙識校

アカナ 印 矢川茶 并 ヒノチ

是ハ伊勢松坂在 矢川村ニ作ル処ニシテ 近江ノ名産無ノ

コトナリ

ヒノチハ信楽 江戸ノ紀州御内ニ作ルハ元ノニシテ 近江ノヒノチ

ト同ク 葉茎 紅紫色交ナリ

六二年十一月 安房某ノ 嗣氏ノ作ニ之ノ見聞ス所ナリ

体菜

衣笠氏ノ手記ニ拠リ一名餓菜ノ名アリ

（是ハ豊道昭ノ誤ノ由）

体菜ハ菘ノ属ニシテ近年各地ニ傳播ス既ニ昨年十月陸中盛岡ノ市中ニ賣ル所ヲ得テ食セシ事アリ其長サ一尺三四寸アリシ此菜種ノ始テ本邦ヘ傳ハリシハ[redacted]明治八年清国ヘ派出セシ岡毅氏ヨリ旧勧業寮第五課ヘ送附セシモノナリ

此菜ハ白菜山東菜ニ似タレ𪜈彼ノ如ク嫩白軟薄ナラズシテ地上ニ簇生シテ強硬ナリ其茎ノ本ハ濶ク互ニ相抱キ團塊ヲナシ夫ヨリ上ハ細ク狭ク全茎ハ微緑ノ水白色ナリ葉片厚ク硬ク表面濃緑色裏面淡緑色ニシテ葉脈著シシ葉ノ全体白粉ヲ帯ビ縁ニ末ハ圓ク匙状ヲナシテ開放ス方今首種傳ニ培養スルモノハ長大トナラズシテ高サ七八寸ニ過ギズ根ハ至テ小シトス

播種ハ東京ニ於テハ秋ノ彼岸ヨリ五日或ハ十日ノ度トス或ハ十月

△又山東菜白菜ノ如ク変化スルヿナシ

須近ニ時ニ播種シテ冬菜ニ充ツベシ彼岸後十日過キニ播種セシ
十月下旬ニ採食ニ宜シ此種ハ諸菜中ニテ最モ種子ヲ採集シ
易シ△花ハ薹ノ稍末ヨリ開キ傍枝ノモノ皆同時ニ開花ス
莢ハ短ク太ク種子ハ黒褐ニシテ大粒ナリ（三四分按偶ノ説）
全草ノ看ハ山東菜白菜ニ比シテ頗ル硬固ナル如ケレドモ煮テ
食スルニ軟脆佳美ナリ
此菜ハ体菜ト称スル外未ダ和名アルヲ聞カザリシガ昨夜ノ夢ニ
此菜ハホテイナト称スルヿヲ聞ク按スルニ布袋菜ノ称ハ他物ニ
アルヲ聞カズ又此菜ノ形状ヲ以テ論ズレバ布袋ノ称大ニ適ス
ル所アルガ如シ知ラズ専門ノ諸家果シテ此称ヲ彼ニ命ス
ルヿヲ許スヤ否

明治十二年二月二十六日　田中芳男識

其始メテ傳ハル年ハ已ニ久シ明治八年清国ヨリ
出タル種子ヲ以テ勧業寮ニテ試植シ繁殖シタルモ
ノナリ

前略
全茎ハ微緑ノ水白色ナリ其葉ハ厚ク硬ク表面
濃緑色裏面淡緑色ニシテ葉脈著ルシ葉ノ全形
ハ倒卵形ニシテ末円ク其中肋ハ肥状ナリシテ開放セリ全
草ノ長サ大トナラハ七八寸ニ過キス根ハ直ニシテ秋ノ
彼岸ヨリ五日或ハ十日ハカリ後ヲ度トシ十月頃迄時々播種
シテ冬菜ニ充ツ一ト彼岸後十日過キニ播種セシモ
ノ十月下旬採食スルニ宜シ此種ハ諸菜中ニテ
最モ種子ヲ採集シ易シ花ハ薹ノ稍末ヨリ開キ
傍枝ノモノ皆同時ニ開花ス莢ハ短ク先キ太ク種子
ハ黒褐色ニシテ大粒ナリ山東菜白菜ニ比シ
甚タ硬キ如ケレトモ煮テ食スレハ軟美ナリ参考ニ供ス

御請

麦

[illegible]

件華ノ[illegible]言[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十二年三月七日

大石[illegible] 拝

田中芳男先生閣下

禮菜ニ御説拇見仕
大石ヲ申セハ即チ鹽
ニ説ミシテ（小生ノ註）鬻ヒ語ル
青ヲ抄（柱）ノ税アリ
或ニ自別ニ異見モアリ
體菜ノ名称ハ未出典
見當リ不申ノ體ノ字ヲ
用ラル由ハ皆テ閩粤民ヨリ
出ル処ニ叫セ其後山本
也文氏ヨリ餘ノ字ヲ用ヒ

侍菜ノ名ニ調ヲ [illegible]

安海 [illegible]

ル由ヲ承知セバ其両字共傳播セシニ由リ根岸辺抔ニテ栽
其出典詳ナラザレバ其何レカ植シ販鬻スルモノナラニカ而シテ
是ナルヲ知ラス以高ヒ花ヲ見タルヲチナハ蓋シ偉菜ヨリ轉訛セ
蓋シ俗称ニテ可之ト為ス[illegible]ナラニカ育種場ニテ是（新宿農事試験場）近漫ニハチ
○布袋菜ノ称未タ[illegible]ト称シ来レリ其故ハ鮮ノ略字ナル
他ニ布袋菜ト称スルモノナケレハ其字ヲ誤読シテ錯ノ字トナシ漫
面白キ新名トモ存シ（浅草人家開放ニ四壱アルヲ知）ハチナ唱フル誤ヲ襲ヒ再ヒ轉訛
○昨年小森ニ鮮菜ヲ示セシニナラシカトモ存シ然レ共未タ彼ノ
処（香月）同氏近傍ヘ賣来ル土菜ナルモノヲ見タルヲ[illegible]之ニテ判然
ト称スル者ニ甚タ能ク似タル由ニ付[illegible]ノ實地ニ依リ菌蒔ヲ省ニ入
土菜ト称スル者未タ聞カサルニ付[illegible]除速ヤカニ高教ヲ仰候
ケレ共恐クハ近頃鮮菜ノ語処ニ[illegible]而已[illegible]

三月十八日

申置相心得候而武之儀御筆入御書付
御菜又蔵家ニ而並ニ右調可致旨候様
百姓惣代ニ而御菜ハ中米夕出典等之在中主之
新宿試験場ニ於て外ニ推察ニ付支那地方之方言
可見候半故先ツ◯置ニ而可然之ト存候可見居
支那より於御所趣ニ而先生之日高考相伺
上野へ以申由申候より御座候心得候趣ニ而付
候写しも解、ともかく

蕹菜 又 甕菜 *Convolvulus reptans, w. Creeping bind-weed.*

授時通考 本草綱目 及 成形図説 等ニ載スル所ヲ見ルニ 什八大抵ノ知ル所ニシテ 旧時ニ此菜ナク 之ヲ 質問本草 成形図説等ニ別称ナリ 分明ナリ

状モ亦 旋花科ニ属シ 一年生 蔓草ニシテ 秧子ヲ生ジテ繁殖ス 但シ 茎ヲ挿テモ 生ズ 甚タ 漢渡ニ出ツ

此種 琉球ヨリ 薩摩ニ傳ヘシハ 成形図説ヲ見テモ 年所ヲ経シコトヲ知ル 然レドモ 東京ニテハ（明治七年冬）武田昌次ノ 清国ヨリノ時 秧子ヲ持来リテ始トス 三田育種場ニ 植ル所 二種アリ 一ハ 茎葉共ニ 淡緑色 花白色 一ハ 茎葉共ニ 暗紫色 花色 淡紫 尚 赤甘藷ニ 於ルカ如シ

[illegible]

東京大学総合図書館

形状ハ大ニ異ナルコトナシ 唯茎ノ末ハ美蒂絡ナガ如シ 地上ニ匍テ周ニ
攀登スル 揷子ナケレバ 或ハ他物ニ纏フノ性アリ 実ヲ結ビ易シ 牽牛ノ
子ニ彷彿タリ 折テ地ニ揷シ 又ハ水ニ揷スモ 根ヲ生シテ繁延シ
易シ 清国ニテハ 水田ノ流ニ大曲 筏ノ如キモノヽ上ニ作ルト云フ
茎梢ヲ摘ミ 羞合スル 煮ニ擬スル 生録ニテ食スト 是ニ又苦味アリ
又折レバ茎ニ白汁ヲ出ス
此種西曰冬月寒気ヲ防ク為メ 窖ニ入レ貯フルニ 其葉上ヨリ又向流ノ竹葉 茎葉
茎ヲ延ハ 必ス二孔ヲ以テ 枝ヲ揷シ 蓋ニ水ニ如ク 繁殖シ 蔓ヲ直上延ヒシ 根ヲ水中ニ
垂ルニナリ 且曰 Convolvulus repens ナリト云フ （旧化隆事）

十八年十月五日

田中芳男

コモチハボタン

該菜ハ是迄当場ニ於テ年々之ヲ本場ノ圃地ニ栽ヘ（廿四
者ハ同法ニ栽培セシカ当[illegible]徒長シ満茎毬ヲ生スルモ結着セス或ハ
腐去ニ至ル[illegible]リテ列[illegible]

武蔵国 都筑郡 王禅寺村

[illegible]フケレ氏 毎年好
[illegible]ニ硬固緊密
[illegible]地軟ナル故
[illegible]建物ノ残礎硬
[illegible]長キ好結果ヲ得タリ
然ルニ是迄ノ圃地ニ栽培セシモノハ相替ラス不良ノ景況ナリ 因テ今般
ニ思考セシ処偶々該菜ノ栽培ニ適地セシヲ発見タリ 然レハ今ヨリ年ニ
続テ好結果ヲ得ルハ難カラサルベシ 本年時初ノ好結果ナルヲ以テ其実ヲ
研呈シ以テ正評ヲ乞フ

東京大学総合図書館

武蔵国都筑郡
王禅寺村

丁内資料 東京大学総合図書館

形状ハ大ニ異ナル事ナシ 唯茎ノ末ハ蔓様ヲ生スルガ如シ 地上ニ匍テ到ニ
攀登スル 揮モナケレド 或ハ他物ニ纏フノ性アリ 甚ダ繁殖シ易キ草卉ナリ
子ニ 彷彿タリ 折テ地ニ挿シ 又水ニ挿スモ 其ニ根ヲ生シテ繁殖シ
易シ 清国ニテハ 水田ノ疏水由 鐵ノ如キモノヽ上ニ作ルトキク
茎梢ヲ摘ミ 羹ニ合シ 或ハ書ニ[illegible]シ 生鮮ニテモ 食スト是ニ 甚ダ苦味アリ
又折レバ 茎ニ 白汁アリ
竹[illegible]西田[illegible]氏[illegible]栽培ヲ[illegible]甕ニ入レ[illegible] 蔓茎上テ 又河流ノ竹籠 甚[illegible]
[illegible]ヲ以テ 茎ヲ挿シ[illegible] 水ヲ以テ 繁殖シ 蔓ヲ夏上[illegible] 根ヲ水中ニ
垂ルヽコトナリト 具曰 *Convolvulus repens* ナリト云 (旧[illegible])

十八年十月五日
田中芳男

コモチハボタン

該菜ハ是迄当場ニ於テ 年々之ヲ尋常ノ圃地ニ栽ヘ 甘藍等ト同法ニ以テ栽培セシカ 苗徒長シ満茎毬ヲ生スルモ 密着セス 或ハ蚜虫ニ害ヲ被リテ 到底作用ナラス 然ルニ播州葡萄園ニ於テハ 数年之ヲ栽培スルニ 別段栽培ヲ務ムルト雖 稀ノ一年モナケレ氏 毎年好結果ヲ得サルナシ 常ニ之ヲ遺憾トセシカ 偶々播州ハ土質礎硬固緊密ノ処ニシテ 此ノ好結果ヲ得ルヲ見レハ 当場ニテ栽培セシ圃地軽軟ナルノ故ヲ以テ 好結果ヲ得サリシモノナランカト思起チ 本年ハ旧建物ノ残礎破圃ノ地ニ之ヲ栽ヘ 数列ノ栽培法ヲ行ヒシニ 果シテ如斯キ好結果ヲ得タリ 然ルニ是迄ノ圃地ニ栽培セシモノハ 相替ラス不良ノ景況ナリ 因テ余ガ畏ニ思考セシ処 偶シ該菜ノ栽培ニ適セシヲ発見タリ 然レハ今ヨリ年ニ隨テ好結果ヲ得ルコト難カラサルベシ 本年始メ好結果ナルヲ以テ 其実ヲ拝呈シ 以テ高評ヲ乞フ

十二月廿五日

竹中卓郎

子持葉牡丹鑑定の説

子持葉牡丹の栽培に尽力せられし結果として該蕾葉華を贈附せらる因て熟覧するに甚成長し肥大なりと雖も洋風なれバ所謂緑菜料理に適当なるといふべし西洋にて此菜を食料に用ふるは肉の相手にも供せども多くハ附物なれバなし食単の中に二ヶ三ヶ入る和の大さすこぶる小く締り如何にも小人島の太鼓葉牡丹とも名つくべき指揮附すきを貴色せり是ハ生来作りし者ゆへ甚だ便地く栽く肥料をも与へて栽培すると否とにより結果を以て多くの蕾葉を生じ茎の脇毎に小球を着くる事あるべし記して参考に供す

明治十八年十二月廿六日

本草図譜ノ写ニ在
此二種ヲ分ケテ図ヲ別
セリ
芹花菜菜類
馬芹トス

（英華字典）
芹菜　塘蒿
早芹菜　芸々
芙
蘄

（英華字典）
旱芹菜

洋芹ノ訳

物品識名 オランダゼリ セルリー 英名 キヨマサニンジン ヲランダゼリ トアリ
二名トス 英語ヲ キヨマサニンジン ヲセルデリー トス 遠西方名物考ニ
洋芹トス 甚混シ易シ今左ニ分ツ
（乙）オランダミツバ 一名キヨマサニンジン（同上五ノ十八ウ）
（按ニ）八ノ土ウ人参條中 キヨマサニンジンニ云ヘルハノイヘル
（乙）Apium graveolens, Linn. 塘蒿（英華韻府）（翻訳名義）
英 Celery 蘭 Selderij.（英華字典）早芹菜 又塘蒿
オランダゼリ（草木図説）（前編下ノ九ウ）馬芹疋
（甲）Apium petroselinum, Linn. 旱芹菜（英華韻府）
英 Parsley 蘭 Peterselie（三才図会之）荷蘭高

三田育種場
竹中卓郎書

農商務省
田中芳男

[illegible]

東京 製紙會社

東京大学総合図書館

外ニ無之候 此段御答申
上候

一 西洋料理ニテ（パルスレー）ト云フ
一 香菜ナシ 支那ニテ（芫荽）ト云フ
又（香菜）ト云フ 此菜ト支那人殊
ノ外賞翫スルモノナレ氏 本邦人ハ唯
黄檗宗ノ僧侶ハ専ラ用ユルモノ
ナリ 當地ニテ此菜屋ニテハ西紀
於サス右（パルスレー）ハアレ氏香菜
ナシ 香菜ハ横濱支那人ノ庭
ニ有レ氏東京ニハナシ此菜ハ芫
荽ノ滋蒼ニヨリ合ヨリト云フ説アリ
不取 右伺申上候

江原素六殿 ... 海 ...

此方より申上候

田中吉兵衛様

九月九日　四谷

何卒貴殿之明日京都へ

出張ニ付子宇陶器ヲ

付出

御覚

九谷大村産屋羽毛取扱

之節呈読紙ザット湯煮

シテ醋醤油或醋味噌ニテ用

ヒ又ハ味噌汁ニモ直チニ用

食ヲエヘス

従来某氏某村開数ニ海地

ヨリ此時ノ地方近ヨリ御

安読地ニ地描[illegible]

田中先生　　参

与段

高論拝見仕候　香菜之義ハ御説之通リ[illegible]

ニ相見候得共　荒蕪ノ事ニテ　即コエビトロ

ト偶々唱へ候モノナリ　今ノ白アルニ依リ　香菜

ノ名ヲ付キモノナルヘシ　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　一冊拝借

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

田中先生　　参

九月二十日

[illegible]図にて中ニ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]地図[illegible]
[illegible]
[illegible]図[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
早々頓首
[illegible]月十一日

田中光顕

田中大人

東京製紙會社

東京大学総合図書館

御答

香菜即芫荽接ハ中等ノ菜也
右ハ各種ノ用ヒ方モ有之ナレ夏季ニ一セル
リシ上ナナカ食用スルヨシ即二株ヲ
入レテ乃チ特ニ記シ備ヘテ香菜ノ種
取寄方相願候也
右セルリーノ原字不詳ニ付取調方ヲモ
熟ニ望ミ此菜モ多少香菜アリ候也

廿月廿九時ニ一五植物ナラニ
右ハ緒言ニ往さゝそのし白
田中先郎 □□
玉案下

拝啓 昨日小集ノ節ニ萬年寺ニ於テ
オモ青葉ヲ一寺ニ帰陽後御調べ
ニ候処 一年シ一井洞梅ト外ニ梅本産
ナリ到来ノ様子ノ如ニテ青草青
葉草ノ二種ヲ分ケテ青葉ニ無之ト
可被存 兼テ御承知下度存候

九月廿七日
小川安村

田中芳男様
貴下

陶氏曰牛舌菜ハ
羊蹄ノ属ナリ
和名ギシギシ

御答
香ノ種類ハ西北辺ヨリ
渡リ来リシ者ニテ南方ニ入
電流ル早キ勤菜ト
アルハ（勤）ノ誤ニテ
ナシ
雪梨紅菜ハ
香菜ノ何菜ナルヤ一定

清俗　香菜ハ何ナルヤ
三田手下照之助
香草ハ　メバ草　羅勒カ
香葉草ハ　コヱニトロ　胡荽カ
田芳

陽氏曰牛石葉ハ
チキノ扇ナリ
紅ノ外ニ[illegible]

東	雲	紅葉

此種ハ何レ
ニモ[illegible]
九月末
田中屋[illegible]
[illegible]

東雲ハ絞リ咲[illegible]
[illegible] 早唐紅[illegible]
早咲葉ハ[illegible]きり
カラニ咲ギリ[illegible]外ニ[illegible]他ニ咲

[illegible]

此[illegible]九月[illegible]

[illegible]

陽[illegible]

九月[illegible]

田野

[illegible]蔬菜[illegible]

[illegible]

陽氏[illegible]

雲南紅茶

東京茶

東京大学総合図書館

陽氏曰牛乳煮茶ハ
……[illegible]

護啓
え[illegible]

支那人平生之を冬春香葉の義[illegible]
茶経も[illegible]印ケ花[illegible]
牛乳（支那語[illegible]）
雲梨紅茶
東京茶

本郷金助町
廿二番地
田中芳男殿
執事中
郵便はかき
此表面ニハ宿所姓名ヲ限ル[illegible]
[illegible]
大日本帝国政府大蔵省印刷局製造

茶経之[illegible]
[illegible]
支人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
田中先生御中
九月[illegible]

東京大学総合図書館

陽氏曰牛乳菜ハ
手キノ扇ナル
紅ノ[illegible]

コラニ然リ 香ニ堪タル葉ヲ用ル 陽氏ナリ

其ノ横濱ヨリ来状ス [illegible]

護摩陳ヲ遅ク[illegible]シテ 南京芹 セロリー

ヘ 満名[illegible]

旱勤(ホニカニ)菜(トサー)

支那人[illegible] 香菜(ピーサイ)の義[illegible]

伐姪モ[illegible]

牛乳(支那語[illegible])

雲(キニ)[illegible]紅菜(トサー)

東(トニキニ)菜(トサー)

香菜ノ食ニ方ハ多ク肉類ノ調理ニ多ルヘノハ上ニ置ニ二三葉ヲ上ルナリ本邦ニテハ香菜ヲ刻ミテ肉ノ上ニ置ニスル方都合宜シカルヘシ之ハ肉ノ腥気ヲ止ム韮葱ヲ刻ミテ上ルト同様ナレ氏香ヒ賤シ故ニ香菜ヲ用ヒルモノナラン

右之通ニ御座候 市場ニ而見かけ候
雪割草者 見本ニ而御覧被下度候
申上候 右者先日御尋ニ付申上候
此段申上候也

九月二日

中島宜 拝

鴻巣様

ハナワラビ 一名フユワラビ 又ヒカゲワラビ

漢名陰地蕨ト云フ 羊歯科ニ属ス 肉筍根宿根草ナリ 此外ナツノハナワラビ 一名オホハナワラビ 漢名蕨萁アリ 尚アキノハナワラビト云フモノ是ハ富士山五合目ニアリ

此陰地蕨ハ陰地ノ名ハアレド ニゲヤトダ ヒメワラビ等ノ如ク全クノ陰地ニハ非ズ 原野又林中ニモ生ズ 明治十五年十月函館ニアリシ 大野村ニ至ル 恵山ノ陽地ニ多ク生ズルヲ採リ食スルコトアリ 又明治十七年九月岩代猪苗代湖辺ニ於テ原野ニ多ク生ズルヲ見テ採リ食スルコトアリ 皆嫩脆ニシテ佳蔬ト称スベキモノナリ 東京附近ニモ生ズルコトアリ 然レ共

上野公園内草原ニ多ク生スルヲ見ヘ誤所モ多クアレトモ
今日ヲ始トス因テ昔ヲ追想シテ備ニ記ス
明治十八年十一月七日　田中芳男記

アクナシ蕨

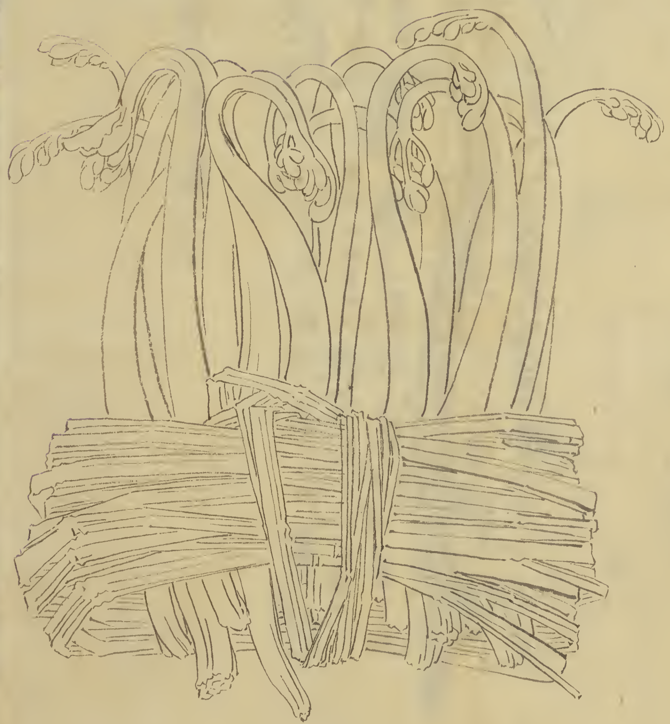
曽テ飛驒ノ郡長ヲ勤メシ神谷道一氏ノ話ニ曰飛州
益田郡高又村中洞ニ一種ノ蕨アリ生ノ侭煮テ
食スルニ更ニ（高山ヨリ七里）苦味ナク参酒ナキカ如シ
故ニ灰汁ヲ用ヒ洒ホスル事ナキカ如トシ人ニ賞セ
ラル　此村ハ信州境ナル乗鞍ト云フ間ニアル僻地ノ
村落ナル由　且此蕨ノ形状ハ別ニ異ナキモ唯毛茸
アルヲ異トス云々

又同飛驒國白川ノ瀬ハ白山ノ中腹ニアリ
長サ三尺ヨリ二千間ヨ余リ直ニ大程ハナキモ或ル間位ハ

[redacted]アラン上流ハ硫化水交ヘニヘ白ク是ニ故ニ名ケリ
如此ノ大瀑布ハ天下万一ト云フベシ云々
明治十八年八月六日聞ク所　田中芳男記

下総船橋在産
明治十六年四月十二日
神田青物市場
ニ於テ買求メ
来ル

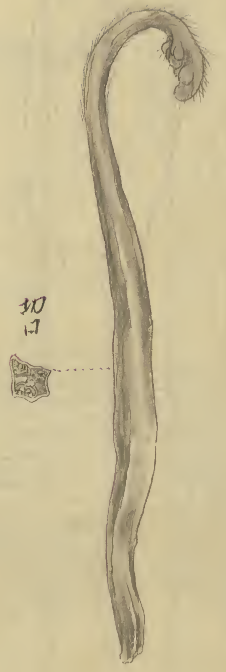
ワラビ
数十五本
壹把ノ量三拾一匁
十六年四月十三日写生



東京大学総合図書館

一御農ヨリ右候人ノ舎第出京昨日又方ハ私考
ヨリ上ノ品々出シ承リ候ヘハ是ハ全ク今朝ハ勧門
ノ際ニ在ル多ク取リ寄セ候ハテ一種ノ品ニテ其ノ名ハ日ノ谷
紫蕨差上候而承リ候ヘハ南会津郡蒲生村産ノ由
サツト茹テ其水ノ停サセテシトヤカス時苦味ナシト云リ
大ヲミソニ入ルノ具ハウマニ、ミミメ、白和、ヒタシモノ等ニテ食ス
又吸物ノ具ニモナス

廿三年七月二十六日



一會津紫蕨

右者岩代國南會津郡伊南郷大桃村ノ産ニシテ之ヲ採ルハ毎年四月五月ノ両月間春山雪解ケテ草木芽生ノ時ニシテ之ヲ生スルハ澤邊ニ近キ岡又ハ山腹ノフロ（瘠墝）土ナリ而シテ土俗男女之ヲ採ル者概ネ十ノ六ナリ然レ𪜈各村之ヲ採ルニアラズ大桃村ノ如キハ隣村中モ多キ所トセリ又之ヲ製スルハ山ヨリ採リ來リタル紫蕨ノ綿ヲトリ（綿ハマリノ心ニ入レ又衣服ノ綿ニマセ用ルモノ𪜈稀ニアリ）大釜ニ沸湯木灰ノ湯ニ入レ煑加減アリ夫ヨリ之ヲ藁莚ノ上ニ並ベ日ニ乾ス之ヲ乾スニハ時々手ヲ以テモミ縮マスモノ

呈上
會津紫蕨
田中様

[illegible]
河原

一 會津紫蕨

右者岩代國南會津郡伊南郷大桃村ノ産ニシテ之ヲ採ルハ毎年四月五月ノ両月間春山雪解ケテ草木芽生ノ時ニシテ之ヲ生スルハ澤邊ニ近キ岡又ハ山腹ノ腐壚フロ土ナリ而シテ土俗男女之ヲ採ル者概ネ十ノ六ナリ然レ氏各村之ヲ採ルニアラズ大桃村ノ如キハ隣村中モ多キ所トセリ又之ヲ製スルハ山ヨリ採リ来リタル紫蕨ノ綿ヲトリ（綿ハマリノ心ニ入レ又衣服ノ綿ニマセ用ルモノモ稀ニアリ）大釜ニ沸セシ湯（木灰ヲ入レタル）ノ湯ニ入レ（煮加減アリ）夫ヨリ之ヲ藁莚ノ上ニ並ベ日ニ乾ス之ヲ乾スニハ時々手ヲ以テモミ縮マスモノ

津郡伊南郷大桃村ノ産ニシテ之ヲ
ノ両月ノ間春山雪解ケテ草木芽生
澤邉ニ近キ岡又ハ山腹ノ（廣墟）フロ土ナリ
採ル者概ネ十ノ六ナリ然レモ各村之ヲ
キハ隣村中モ多キ所トセリ又之ヲ製ス
紫蕨ノ綿ヲトリ（綿ハマリノ心ニ入レ又衣服ノ綿ニマセ用ルモノモ稀ニアリ）
湯ニ入レ（莨加減アリ）夫ヨリ之ヲ藁莚
乾スニハ時々手ヲ以テモミ縮マスモノ

紫蕨

様

河原田末吉

東京大学総合図書館

トス又青干ト云フモノアリ又ハ沸湯セシメタル湯ニ入ルヽヤ煎
ニ入レ苦ミヲ抜スルノミニシテ深ク煑ザルモノナリ此青乾ハ岩茸等ノ品
ニ限ルモノトス青乾ノ名産同郡黒谷村大沼郡蒲生村
等ナリ會津紫蕨ハ一ノ産物ニシテ之ヲ出スハ南會津、大沼
ノ二郡中ナル岩郷、伊南郷、金山谷、上伊北、下伊北ノ五郷
ニシテ壹ケ年凡[redacted]千駄計リナリ壹俵十貫目三俵ヲ壹駄
トシ此價凡壹萬七八千円ヨリ二萬円位ナリ

明治十三年十二月十六日　河原田盛美稿

岐阜縣飛騨國益田郡高根村産蕨粉製造法

一秋期彼岸ヨリ翌年蕨芽發生ノ頃マデヲ採堀ノ期節トス但蕨芽發生以後ハ根中精氣薄キ故製造スルトキハ粉少クシテ益ナシ

一蕨根ヲ堀取リ能ク土ヲ洗ヒ落シ之ヲ平盤ナル石ノ上ニ置キ木槌ヲ以テ細カニ打潰シ之ヲ甲桶或ハ甲木舟ニ入レ（木舟ハ直經壹尺六七寸長サ一丈位ノ丸木ヲ用フ）水ニ浸シ能ク揉出シ糟ヲ去リ乙舟ノ上ニ漉箱ヲ据置キ（漉箱ハ底ニ簀ヲ敷其上ニ打潰セシ蕨糟ノ筋ヲ敷キ細カキ糟ノ漏レヌ様ニスルナリ）揉出シ甲桶舟ノ水ヲ漉箱ヘ汲入漉汁乙ノ舟中ニ溜ルヲ其侭置キ翌朝其上水ヲ去レハ乙舟底ニ赤黒キ蕨粉沈澱シテ存ス之ニ水ヲ加ヘ攪

交セ節馬尾ニテ丙ノ桶ヘ漉入レ又其侭ニ置翌々
朝又其上水ヲ去リ底ニ蕨粉アルヲ能ク水氣ヲ取ルナリ
水気ヲ取ルハ木綿又ハ布袋ニ釜中ノ灰ヲ入レ之ヲ桶ノ中ニ入レレバラリ置ケハ水気コトゴトク去ルナリ 桶沈ミ之ル
粉上ナルハ色黒クシテ悪シ故ニ取テ之ヲ自用ノ食物ニ宛ツ
下ニ沈ミタル白色ナル所ヲ取テ干燥ス是則普通ノ品ナリ
一右白色ノ粉ヲ桶ニ入レ水ヲ和シ攪キ回セハ白水トナル之ヲ
絹節ニテ漉シ前条ノ如ク再製スルトキハ最上等品ナリ
一蕨根拾貫目ノ製造粉左之如シ
食用ニ宛ツル下等品壱升五合 此代價金三銭
普通粉四升 此代金貳拾三銭
右普通之粉ヲ再製シテ上等品トナスドキハ凡壱
割ヲ減ス故ニ代價随テ増加スルナリ

一壱升ハ目方三百目ナリトシテ算ス

右之通ニ御座候也

明治十八年十月廿五日
岐阜縣飛驒國益田郡高根村
戸長 中尾彦助

信州伊奈郡植物話ノ内（奥村静三氏ノ話）

一ゼンマイ 大ナル株ハ径二尺モアリ 地中ノ根ハ椒欏(ヘゴ)ノ如ク内部ニ幹状ノ者アリトテ

一大鹿村（大河原村 鹿塩村ノ合スルノ称）ノ山中一里許ナマス澤ニワサビ自生多シ 谷間一帯葵畑ノ如シ 従来人ノ随意ニ取ルニ任セタリシガ 近年該村ヨリ保護人ヲ住居セシメ 採集繁殖ヲ謀リ 暴採セザルニ至レリ 其大ナルハ長一尺ニアリシ由ナリ（鹿塩村ハ塩水ノ出ル村ナリ 近年堀抜シテ其水ヲ焼セリトモ）

一園原ノ帚木ト称スル有名ナル樹ハ ヒノキトサハラトノ中間ノモノハ様ニ見ユル由（園原ハ古保ノ名ナリ）日本ノ山岳ヲ園原ヲ経過シテアリト云

一 園原山ハ オホヤマレンゲ 二種アリ 一ハ 幹ノ径 三寸ニ至リ

一ハ 叢生シテ 幹ヲナスニ至ラズト

一 近年 ヨツバギリ ト称スル 桐苗ヲ 美濃ヨリ 伝フ 形状更ニ尋常ノ者ニ異ナルナシ 唯一節ヨリ 四葉ヲ車輪状ニ 四出スルヲ 異トス 又 六七年ニシテ 朽ヘ大木トナル 尋常品ニ比スレバ 朽ヘ早シト云フ

明治十四年六月二十九日

田中芳男記

ヤルヤ

三田育種場

暑将候之節益御清福奉賀候 陳者

過般御調査御依頼之儀ハ全ク日光庵ニ参リ承候北海道之産ニシテ之ヲ奥羽地方ニ移シ夫ヨリ下野国栗村ノ者日光町ニ移シ又常陸国ニ移シ四五年前ニ始ナリ墻

此節六北里主殿大室寺村杜山氏ニ至リ日半ニ之ヲ国村ニ移植セシモノ四月ノ条発見シ直ニ之ヲ購求シ凡五百株計本場ニ移シ植ルノミ外ニハ未タ培養スルモノ無之由ニ候 即後面ヨリ発セシ新芽四五本即今枯古根ヲ圃中ニ植置候間

先ハ繁殖之機ヲ以テ右御返事旁得貴意候 謹言

十四年十月六日

竹中卓郎拝

田中芳男殿閣下

東京芝區三田四國町貳番地

[illegible]

年中獨活

随テ刈獲スレハ随テ萌芽スル故ニ名ツク

此獨活ハ駿河国益頭郡策牛村近村ヲ発見セシモノニシテ近村ノ農家種根ヲ請求スルモノ多キニ至ル同村野村温ナル者試験セシニ好結果ヲ得タリトセト明治十二年十一月某日会括ノ如キ長サ七八寸ノ種根ヲ畑ニ植シメリ即日尿水ヲ施シ繁殖セリ

十七年春ノ彼岸過ニ三四根ヲ刈獲セリ夫ヨリ繁殖ノ為メ尿水ヲ施シ成長セシメ秋ニ至リ再ヒ又刈獲セシモ結実セズ

十八年ノ春ニ至リ六七根ヲ刈獲スル後漸次ニ収獲スル四回ニシテ止メリ亦繁殖ヲ企図シテハ今年ハ繁殖益々盛ニシテ既ニ結実スル模子三四株ニ過キ可ナリ

肥料ハ刈獲スル毎ニ尿水ヲナスニ施セハ格別細小ニハ至ラス

明治十八年十月　小石川区大塚窪町

鈴木允輯

日光ニ而雲ウドト云義
日光ニ付早速栃木縣ヘ
照會シ雲ウドナル[illegible]
答ニ矢張普通ノウ
ド之根ヲ食スル為栽ヘシ
萌モ芽生ヽ移モ同者ナリ
外別種無之趣回答
ニ付尚幾度モ右栃木縣ヘ

此種ハ埼玉縣ノ方通
ニヨリ無之候ト相考申候
為念右之[illegible]上栽培縣名
並郡名等異ニ致候[illegible]

右得貴意候 勿々
如是御座候
十一月[illegible]
山本[illegible] 拝

田中大先生

別紙

追而申遣候肥後之内
実葉之草樹産地付
彩色付候を往々入念ニ処
於十羅巴龍之葉之類
二付有之候事

其墨相談ニ於て
申遣候ウド之義ニ付
此面御相済候
早速返日夜相願申成恐

確之証ニ相成候
接続着訴
駿河地方ニ拵候迄
日本紀ト日學館之
根ニも蔵佩ニ覧し候
之ハ礼ニ可有哉相成候方
原稿ハ書中ハ礼ヲ以て
右得貴意候
何しめ氏様

十月廿一日　宗[illegible]拝

田中太先生　函丈

檜枝岐うどげ　五寸位ニ
一旦水ニ浸シ置キ切リテ
三盃酢ニ食ス又味噌汁ニ入ル

是ハ南会津郡
ミナ河原田氏ノ[illegible]ヲ
煤気多キ一隅ノ際
厨ニ浸ス[illegible]
[illegible]華ノ[illegible]
[illegible]
十九年十月　[illegible]

十有方 米吉様

と〻し 西谷之

乾ふき 陸中中閉伊郡産

ふきの皮を剥て生にて干す流水にさらし居し

生にて干したるもの又ハ湯にて煮て流水にさらし居し生にて用ゆ

ミヅナトロヽ

ミヅ一名ミヅナハ蕁麻科ニ属ス多年草ニテ肥大ナルハ丈余ニ至リ多ク株アリ東京地方ニモ陰湿地ニ多ク生ス茎肥大多液葉モ亦厚ク軟脆多液更ニ繊維モ全草ヲ煮テ食スヘシ会津地方ニテハ此茎ノ根際ニ大キ所ノミヅスヲ蒸煮シテ同種ヲ製スニヨリ粘汁ヲ作リ食スルヿトロヽ汁ニ異ナラス但シ書見ニテ按ニミヅナ並食シテ害ナシハヒミヅナ葛ウハミナウ亦同ニ性ナル故法ヲ適用スヘシ但シカモミツナハ多肥ナリテ食スヘシ多ク茎ノ軟脆ナル所ヲ取テ用ユヘシ

十二年十一月　田井記

蔬菜乾燥試驗記

一乾燥器ハ仮ニ果物乾燥器ヲ用フ此乾燥器ハ一日ニ石炭五拾斤ヲ以テ湯煠セシ莢豌豆拾貫目ヲ乾燥シ九百目ノ乾物ヲ得ヘシ松薪ノ能ク乾キタルモノナレハ一日拾壹貫目消費シテ同量ノ乾燥物ヲ得ヘシ

一乾燥後減料比例ハ莢豌豆四拾貫目ヲ湯煠シ是ヲ乾上ケ三拾六貫四百目ヲ減ス則百分中九十一ノ水分ヲ含有スルノ割合ナリ葱欵冬等モ大概豌豆ノ割合ニテ宜カラン但此二種ハ採收後兩三日ヲ経過セシヲ以テ精細ニ考フルヲ得ス

一豌豆芋ノ如キハ乾燥スル𪜈甚タ遲緩ニシテ葱及ヒ菜類ハ濡キ手ヲ以テ強ク壓迫シ水分ヲ除キタル後蒸發器ニ入ルヽカ故ニ意外ニ早ク乾燥スルモノナリ

其他慈姑蓮ノ如キモ豌豆ニ比スレハ頗ル乾キ易ク
シテ大低十分ノ二三ノ薪料ヲ減スルヿ得ヘシ
一薪料ハ石炭ヲ用フル方火氣強烈ニシテ能ク早ク乾
燥スレﾄﾞ火力強ニ過キ往々焦ケ易キノ患アリ故ニ
上等品ヲ製スルニハ松薪ヲ用ユル方宜シカラン
一乾燥英豌豆ハ一斤ノ代價平均拾五錢七厘ノ割合ニ
シテ之ヲ沸湯ニ浸スﾄｷハ原量ニ復スルヲ以テ一斤
百貳拾匁ニ此水分壹貫九拾貳匁ヲ加フレハ其原量
壹貫貳百拾貳匁トナル此比例ヲ以テ考フルニ假令
ハ壹人ノ負荷拾六貫トスルﾄｷハ此水分百四拾五貫
六百目ヲ加ヘ則原量百六十壹貫六百目ノ多量ヲ壹
人ニテ運送スルヲ得ルノ割合ナリ
一今度試驗ニ供シタル乾燥器ハ極小ニシテ壹人ニテ
充分ニ使用スレハ二基二人ナレハ五六基ハ取扱ハ
ルヘキモノ只一基ヲ用ヒタルカ故ニ精密ノ比例ヲ
取ルヲ得サレﾄﾞ只其大略ヲ揭ケテ以テ參考ニ供ス

記

一金三圓五拾錢　英豌豆四十貫目代此乾物三貫六百目ナリ
一金五拾錢　松薪廿貳貫目代
一金三拾五錢　石炭百斤代
一金五拾錢　人足二人手間
一金拾五錢　器械損料
合計金五圓也

右代價ノ計算ハ東京市街ニ於テ製造スルノ割合ナレ
ハ之ヲ田舍ニ移シ原料及ヒ薪料等廉價ノモノヲ撰ミ
器モ亦大ナルモノヲ用ヒテ大ニ此業ニ從事スレハ殆

卜十分ノ三四ヲ減却スルヿハ容易ナランヿト思考ス

三田育種場
竹中卓郎

明治十八年三月

本文ハ先達テ池田場長ヨリ下命有之候ニ付魯国製ノ乾燥器ニ倣ヒ試製セシ概略ヲ記セシモノニ有之候御参考ノ為メ差上申候一覧ノ上御下渡シハ、卒業ニ至ニ而謹言

十八年六月三日

竹中拿

田中先生閣下

大阪本世ニ有之分ニ而ハ

一 湖月文庫 女安珠文庫 全
万用宝訓
元文三年 共 田氏架郷編
大阪高麗橋
書林 河内屋八兵衛 板

一 女筆宝代諸礼識 全
享和年月ニ而

トナ分ノ三四ヲ減却スルコトハ容易ナランコト思考ス

三田育種場

京寺町通松原上ル町

菊屋七郎兵衛 様

右婦人姙娠中 令御用

アザミ イヌトリ スベリヒユ

前二本ハ製本仕候由 仍テ

四大弁急 受取

備定之候 二冊二十五銭

廿二年三月四日

蒼蝿食又ノ中アザミスベリヒユイタドリ

アザミノ葯根ハ細根牛蒡ノ如クニシテ麻油ニテ煎熬シテソノ味噌ニ製スルモスハ数日モヌミスル等寿呆九州西周防岩国ニテキニシタルヿアリ 馬歯莧鹿杖ハ救荒便覧ニ載セ農家備要ニハ馬歯莧ニテ滋味ヲ製スル其色赭シ云々 鹿杖ハ其茎若キヲ採リ水ニ投シ漬スルヤニキク

右佐野ニ答フル聊ナ斯ノ如シ

明治二十一年十二月五日

田中芳男殿

篠田定之

又農業会書五穀菜ノ説ニ小荷葯色ヒアリ分業ニシテ食スルハ葛山産ノ茎ニ似テ淡ク利ナリヤハニカニシテ茎同ニ作ルヤアリ苦ノ時又ハカキ時茎キラカヤ蘇キヲ蓑荷ヘモヒタヒモナドニ用ユ糖ヲヤニナル久シキ血[illegible]新色ヲ増スニヒ

明治廿八年十一月十七日写ス　田芳

蘘荷(メウガ)実之説

尤テ図書ノ名義錦ニ係ス

従来メウガヲ蘘荷ニ充ツルハ植物名実図考三巻六九葉ニ載ス蘘荷ノ条メウガト大ニ異ニシテ同六巻三九葉ノ陽藿ノ図メウガニ疑ナシ

按スルニ蘘荷ハ林氏分類第一綱第一目自然分科蘘荷科ニ属スル所ノ宿根草ニシテ羅甸名ヲ Zingiber mioga, Roscoe (Amomum mioga, Th.) ト云フ形状ハ世人ノ普ク知ル所ニシテ其ノ花ヲ俗ニメウガノコト称シ食用ニ供ス 其生ズル地下茎(Rhizoma)ヨリ長サ二三寸乃至四五寸許ノ形筍(タケノコ)ノ如キ大小数片ノ苞アリテ毎苞四花ヲ蔵シ熟スルニ甚花ノ成熟シ実ヲ結ブハ甚ダ稀ニシテ年来蘘荷ヲ培養スル七十余ノ老人ノ話ニモ数十年間僅ニ三四回見シニ過ギズト云フ 予モ此実ヲ見ルハ今日ヲ始トス 今日見ル所ノ熟実ハ下総西葛飾郡柳橋村ノ茶園内ニ結実スル[illegible]ヨリ去月廿五日田中芳男君ガ博物局ニ携

先達来拙宅ニ於テ[illegible]

[illegible]

持セラル者アリ其状ハ叢苞中ニ發シ光厚紅色ノ三片アリ其形鈍三稜ニシテ長サ一寸許一片ハ大ニ他ノ二片ハ稍小シ是子室ノ熟シテ三開裂セシモノナリ其大片ニ隆起背筋状ヲナス所アリ即チ胎坐ニシテ子粒三個ヲ着ク其子粒ハ白色苞質ノ薄皮ニ包裹セラレ大サ一分許ニシテ形ノ稍圓質堅ク外殼ハ黒色仁ハ白ク甚膩即チ胎坐ヘ着キシ所ハ少シク紅黄色ヲ帯ヒタル環状ヲナス厚朴ノ花ハ毎苞四花アリテ常トスレハ其花皆結實スヘキ理ナレド今見ル所ニ就テ考フレハ僅ニ一花ノミ成熟セシモノト見ヘ他ノ數花ハ萎縮シテ尚其形迹ヲ熟實ノ側ニ又苞中ニ存留ス 萎縮セシ花ノ形迹ハ苞中ニ在ルヲ以テ圖上ニアラハ見ヘス

因ニ曰蘘荷ノ實ハ本草図譜八ノ十二載タリ大日本農學報告第四十三號ニ図アリ

明治十八年十一月

藤野寄命記

持セル者アリ其吹久叢包中ニ發光呼紅色ノ三片アリ其形鈍三稜ニ
似テ開裂シ後ニハ後實珍トキ
所以ハ人ノ未タ嘗テ其結實ヲ見サル
者ナレハ前條ノ植物学者ニ寄スヘシ
因ニ云フ此ノ植物ハ江戸ノ藥中ニテ
ナテリノ七ハ
徳田佐一郎
記

物産會報ノ稿ヨ

會員岩手縣下陸中国東磐井郡摺澤驛小原
吉四郎氏ヨリ蘘荷ノ開花結實ニ就テ図画ヲ添テ寄セラレ
タルニ付其ノ問ニ答フ
蘘荷ハ普通ノ食用品ニシテ形状ハ人ノ能ク知ル所ナリ
其花ヲ開キ實ヲ結フハ余カ嘗テ屢々見ル所ナリ植物学者ノ
世ノ人ハ知ラス珍ナリトスルハ怪ムニ足ラス然レ共一般植
物中一株ニ雄花ト雌花ト開クアリ又雄花ト雌花ト株ヲ
異ニスルモノアリ又雌雄両全花ヲ支持スル者アリ木ノ如キ
林檎ノ如キ則チ雌雄同花ニシテ
ヲ雌雄両全花ノ者ナリ蘘荷ノ花ハ
此ノ如キ花ヲ開キテ實ヲ結フハ甚タ怪ムニ足ラスト雖モ
實ノ十分ニ成熟スル者甚タ稀ナリ又其開花ニ夏秋ノ

拝見仕候 [illegible] 之通

[illegible] 驚入候 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

別アリ木芙蓉 [illegible] 蘘荷ノ條ニ夏ソウガ秋ソウガ
ニ品アリ中略 夏ソウガハ色赤ク秋ソウガハ色白クシテ
肥大ナリ又稀ニ赤キ者アレド色浅シ木芙蓉図譜ニ図シ
載ス其傍ニ節略ノ記説アリ 中略 秋ニ至リ実ヲ結ブ
紅色ノ辨実ヲ含ムト云 又明徐 [illegible] 野菜
箋ニ白蘘荷 赤蘘荷ノ名アリ今ノ家ニ [illegible] 図画
ニ據リテ花形ヲ察スルニ形状本然ヲ失スルコトナクテ
種子ノ着所非常ニ抜出テト思フモ多シ辨ノ蘘荷
花ハ花ノ変化セシ者ナラシカ 又夏秋ニ期ノ開花ニ
結実ノ関係リ有スル者ニアラス 又日蘘荷ニ未開ノ
蘘荷ノ結実セシ形況ヲ [illegible] コトアリ其 [illegible]
不明瞭ニシテ確信ニ難キ所アリ 蘘ニ人ノ [illegible] 実検スル
所ノ冩生図ヲ添ヘ以テ他日ノ參考ニ供ス

別アリ本草綱目啓蒙蘘荷ノ條ニ夏ミヤウガ秋ミヤウガ
二品アリ土用前夏ミヤウガハ色赤ク秋ミヤウガハ色白シト

候所御尋之…
種子…
松ノ實全松葉トヤ蘭花
更ニ此種用之候一本
傳来致候上ニ木年…
植候成言ニ…
下ニ葉ニ植櫻ニ手漸ク見
実ハ有之候花大サ
形状等ハ御示地ノモノニ
相違無之…

別アリ本年閏月改正蒐葉ノ條ニ其ノ分ヲ秋ヨリ
大ナル分ハ皆向ケシ

右之通 摘採り候し
果際計ノミニ而ハ無之
甚タ失望ニ至リ候
先ハ右報告迄
早々頓首

十月五日 金田□□□

田中芳男殿
侍史

四番町土当地
石田清太郎

鎌倉芸術
金松葉ノ進
大正十年十月八日

△福岡県二万五千円内一万八千円 …… 五千円 十九年 三月
千九百円 十四年 五月 六日

菊ノ需用

不断菊ハ黄色中菊ニテ其ノ秋ヘカケテ長ク花咲クモノハ
需用ニ因ニテ採馬組ノ子ヲ冊得得年来ヨリ得テ年ニ栽ス
又播備地方ニ良種ナリ 八アノ手ヲ要素ナシ
食用ノ金採菜ハ明治大正年間ヨリ栽ヘタリ
佐藤誠三氏曰 菊菜ノ大丈アリ 尽ニ近シ 食用ニ甚ダ良シ
菊菜ハ油漬トシ又浸シ物トシテ甚ダキヘキナリ
佐藤氏又曰 菊花ヲ食スルハ 味噌漬ニシテ風味ヨシ 味噌
ノ下底ニ食養シタ人ニハ 揚ゲタル菊ハ 昆布ト共ニ蓋トナス
モノヲ利用スルコト 廣ク利用ノ一ト云フ

本郷金助町
田中芳男殿

△福島分二万五千円内一万八千九円 [illegible] 五千円 [illegible]
千九百円 十四年五月六日迄

書ノ事

不断菊ハ黄色中菊ニテ其ノ秋ヘカケテ長ク花咲クモノヘ
畜用ニ呈ニテ群馬縣ノ辺ヨリ冊津郡辺手毛ヨリ得テ年々栽之
又播磨地方ニ良種アリ ハアノ果ヲ專栽培ス
食用ノ金茄葉ハ 明治大年 [illegible]迄ニ相スタリ
佐藤話ニ氏曰 菊葉ノ大ナル尺ニ近キ食用ニ供ス
園藝ハ 油揚ト又浸ト物トニ供スベキモノ
佐藤氏曰 菊花ヲ食スルハ味噌醤油ト風味ヲ 味噌
ノ下底ヘ食ス方ノ人ニハ 播州ノ事ナリ 長崎ハ蓋トナス
モノヲ利用スル事 薩摩利用ノ一トス

又曰菊ノ千輪使ニ一千個ノ菊皮ニ大丈梅干
（豊后梅ナラ最佳ナリ）十個ヲ入レ味琳酒ヲヒタシ
ニ加ヘ瓶ニ封シ貯ヘ春初ニ取出ス芳香臭ヲ打チ
美味言フ可ラスト是レ梅ノ全ク無味ナル食スルニ
又曰菊花ノ食用法ハ合後アリ圓ナリ面白
十一回ヲ十廿二
二十三年ノ十一月大四ヨリ南クノ平ニ而ノ意工ヲ加ヘア
此ニ至ル　大三郎　田村記

三重縣伊勢國桑名郡
大字桑名町三之丸
坂井弥七ゟ

金針菜 一名金菜

右ハ萱草ノ花蕾ヲ乾ス者ニシテ清国人ノ調理
ニ用ウルモノナリ 之ヲ金針菜又金菜トモ云フ 黄金色
ノ針状ヲナス菜又黄金色ノ菜ノ義ナリ
萱草 萱草ノ種類一ナラズト雖モ 其蕾乾カシテ黄色ヲナ
シ且長キヲ貴ブ 又開キタルモノト餘リ嫩小ノ者
用ヒズ 書ハ
本邦ノ萱草ノ[redacted]クハンサウ 又名ワスレグサ[redacted]
ニ八重ノ者ト一重ノ者トアリ 一重ノ者ヲ宜トス 之ヲ
採ルニハ開カントスル前日ニ採リ 熱湯ヲ注キテ後乾カ

スノミニシテ呈セリ唯乾燥ノ方ノ良否ニヨリテ色ノ善悪
アリ随テ價ニ關スルナリ
萱草ノ屬類中山野ニ多ク生スル者ノ
ヲキスゲトモ云フ甚
茎高ク花多シト雖モ形小クシテ其色尋常品ノ如ク深黄ナラズシテ
淡黄色ナレバ乾キテ色ノ淺キハ當然ナリ故ニ前ノ者ニ
比シテ一等ヲ下レルモノトス
乾カシタル後ハ尚再三撰査シ十分濕気ノ去ルヲ見テ箱又
渋引ノ紙袋[redacted]等ヘ入レ運搬ス成ルヘク塵屑等
ヲ混セシ[redacted]ザラシム

明治二十年二月

田中芳男記

長谷部[illegible]

紙儀板

物産寶庫第十八巻第三十五

支那　金針菜

右ハ勧農局ノ山田敬三氏ノ携フル所ヲ見ルニ全ク萱草ノ花未開ノ者ヲ乾シタル者ニシテ清朝人大ニ賞味スルコト猶翼翅燕窩菜ニ於ルガ如シト此名ヲ金針菜ト称スルハ其観ニ因テ命スル所ニシテ翼翅ヲ銀絲菜ト云フニ同ジ萱草花ヲ食スルコトハ本邦ニ於テハ山村ノ民ノ食スル所ナルノミ且花ヲ食スル菜類ハ西洋ニテ花椰菜朝鮮薊本邦ニテ萱草山梔等ニシテ其類多カラズ尤モ萱草ハ新芽ヲ食シ又花ヲモ食ス花ハ多ク山民ニテ砂糖ニ乏シキ地ニ於テ

調理ノ甘味ヲ補フニ用ルナリ

右萱草ノ乾花ハ清朝ニテ一斤代金三十錢位ノ者ナレ氣上等ノ人ニ非レバ食スルコトナシトゾ我邦ニハ萱草ノ類多キヲ以テ採リ乾シテ清朝ニ齎ラサバ大ニ一産物ヲ開クニ至ラン

萱草ノ種類ハ左ノ如シ

ワスレグサ 一名クハンサウ　ヤブクハンザウ

セツテイクハ　キスゲ

スヂクハンサウ

明治十一年四月十五日

田中芳男記

御答

右ハ清国ニ而金針菜ト称シ [illegible]

[illegible] 調理ニ相用 [illegible]

[illegible] 人 [illegible] 又本邦所々ニ

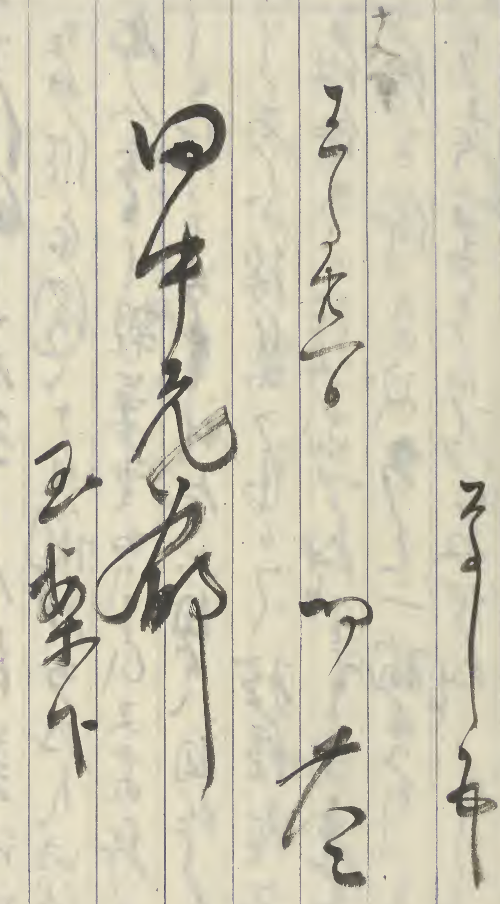
[illegible] 代金六円より八円位ニも

[illegible] 採集 [illegible]

又 [illegible]

[illegible] 一 [illegible]

[illegible]



山葵栽培ノ説

府山道人

山葵ハ深山ノ澥間(タニアヒ)幽翠ノ地ニ生長スルモノナレバ初メ山葵圃ヲ作ルニハ左右ニ蔚林アル幽渓ニシテ絶ヘズ泉水ノ流出スル地ヲ撰ミ一二畝又ハ三四畝廣狭ハ適宜ニシ地ヲ平坦ニシ深サ凡弐尺位ニ掘リ土砂ヲ去リ石ヲ以テ四方ニ畔ヲ作リ泉水ヲ流シテ土砂ヲ洗ヒ後凡ベテ磊石(ワリグリ)ヲ一面ニ敷キ並ベ畦ハ一尺ニシテ畦ヘ五寸間ニ二本ヅヽ山葵苗三寸許ノモノヲ植エ（植ルトハイヘドモ石ノ間ニ挟ミ置クノミナリ）之ヲ培養スルノ術ハ別ニ肥料ヲ要セズ只泉水灌漑ノ多少ト泉水

冷暖ノ度ヲ適宜ニスルノミ泉水ハ冬ハ暖ニシテ夏ハ冷ナルヲ最良トス泉水ヲ灌クニハ山葵ノ根ヘ絶ヘズ流過シテ葉ニ觸レザル様ニシ又外ヨリ少シモ土砂ノ入ラザルニスベシ泉水ハ山葵圃ノ廣狹ニヨレドモ甲圃ヨリ乙丙丁圃ヲ経過ス泉水多クノ山葵圃ヲ流過スレバ泉水ハ山葵ノ養分トナラズ此時ニハ一ノ水溜ヲ設ケテ一旦水ヲ爰ニ溜メテ再ヒ之ヲ隣圃ニ灌ケバ又養分ニナルモノトス（此水溜ハ土砂アルヲ可トス）當時山葵苗入一俵（炭俵ニテ）ノ價金七十錢ナリ之ヲ植ヘテヨリ二十四ケ月ヲ経テ之ヲ採收ス山葵中等品（壹籠五百本入）五六円上等品十円位ナリ山葵ノ品質ハ泉水ノ良否及ヒ冬夏冷暖ノ適度トヲ灌漑スル多少ノ見計ヒトニ依ルノミ故ニ山葵ノ栽培ニ巧ナルモノハ常ニ山葵圃ヲ巡視シテ灌水ノ多少ヲ察シ又手ヲ以テ水ヲ攪シ冷暖ノ度ヲ考ヘテ之ヲ適宜ニス

有害

山葵圃ハ石蟹（イシガニ）（俗ニサワガニト稱シ全躰白色ニシテ背ニ黒點アルモノ）ノ多ク棲息スルモノナリ石蟹ハ山葵ノ根ヲ傷レドモ其害ハ尠シ此石蟹ヲ獲食センガ為メ野猪一回山葵圃ニ入レバ全圃ヲ蹂躪シ山葵ヲ折傷ス其慘状言フ可ラズ故ニ山葵栽培者ハ常ニ猪垣ヲ築キ或ハ襤褸（ボロ）ヲ炠（フスベ）テ之ヲ防クニ最モ注意ス又山葵ハ

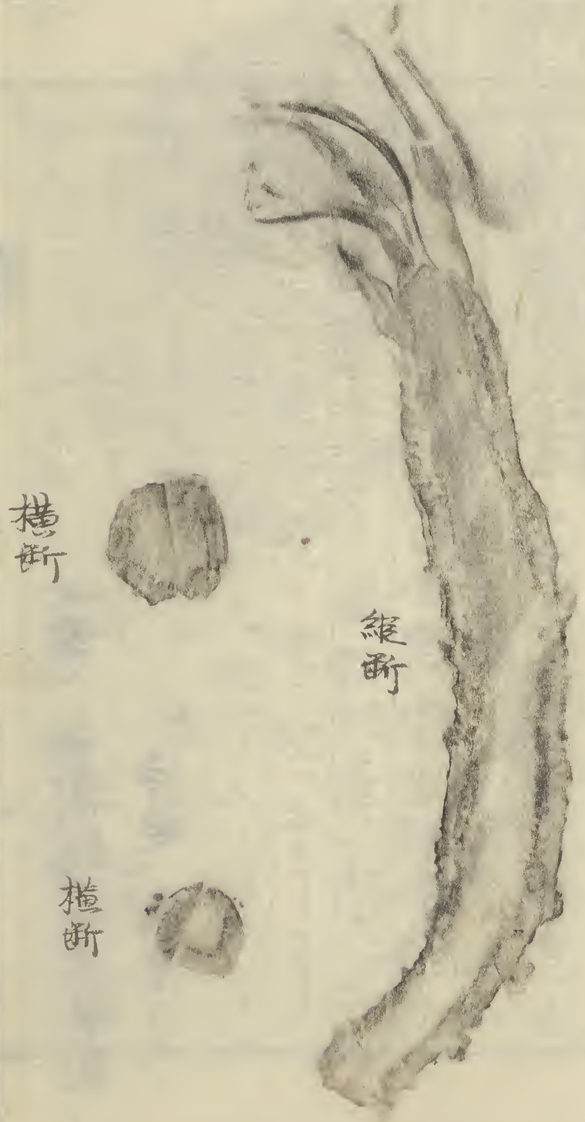
東京大学総合図書館

蚯蚓ノ好テ蝕スルモノナリ山葵圃ニアリテ培養ニ怠ラザレバ其害ナシト雖モ泉水ノ涸レタル時或ハ採収ノ後地上ニ放擲シ或ハ貯蓄ノ時地中ニ置タ時ハ蚯蚓集リ来リ先ツ山葵ノ中心ヨリ喰入リ忽チ全茎ヲ喰盡スモノナレバ栽培者及ビ之扱フ人々ノ最モ注意スベキ事ナリ

十三年六月六日清水ノ分

ワサビ

豆州湯ケ島村 并 地蔵堂村



十八年一月廿五日

土佐産 薑

土佐産薑ノ大ナルハ一昨年高知ニ至リテ実検シ其塊根ヲ持帰リ博物局ニ植ヘタリ 又昨年同縣西内義顕ト云氏ヨリ大日本農会品評会ヘ出品アリテ賞典セシヿアリ 蓋該地産ノ肥大ナルヿヲ知ケリ然ルニ該地ノ産ハ更ニ他ヘ出スヿナキヲ以テ他邦ノ知ルモノ少ク又該地ノ人ハ目馴レテ之ヲ良品ナリト思ハサルヲ以テ屢々衆ニ示スヿスナキニヨリ昨冬 有栖嶋ト云ニ命シ同嶋ニ託テ取寄セシハ 三十メ目アリ代金壱圓廿運賃七十銭許

葉ワサビ

此葉ハ神奈川縣北多摩郡車返シ村産ナリ

東京大学総合図書館

ナリ右ヲ三匁目ニ分ケテ貫ク丁ニ之ニ同謁ヲ送リ
方庭匠ニ漸一時目来ニヨリ用事是ヘニ従ヒテ紙中ニメ
シテアリ故ニ萎縮シ又之ニ麝香入リ又麝紋セシ示シテアリ
折角ノ父ノ良全十本又蕾ニテ甚タ宜カラサルナリ
甚大サハ一個ノ厚サ八九分モアリ大塊ハ七八十目以上ニ至ル
肥大ノ印ハ飾リシテ辛ノ香甚タ宜シ道合ニ又皮ヲ
去リ湯煮ヲ注キ条ニ貫キ乾燥ノ図ヘ
右何為書也　市川兼恭　[illegible]　森[illegible]之
[illegible]　伏[illegible]進　[illegible]　[illegible]之

十九年二月九日　田中芳男記

[illegible]

益御清福[illegible]

右は禁薬なりと存候処御座候
貴館余小堂一つありて
匆々謹白
二月四日 沼田駒治郎拝
田中先生
閣下
追白 七種唐辛子左の通りにて御座候
此等を御申上候
陳皮
番椒
大麻子
罌粟子

東京大学総合図書館

秦椒子、
黒胡麻、
青ノり

[illegible]
一 [illegible] 一本
三年六月廿日 [illegible] 三十号 [illegible]
東京 [illegible]

田中芳男殿
[illegible]
執事御中

樹蘭

嶺南雑記曰、樹蘭葉文解、花似魚子蘭、而香烈過之、五葉者其[illegible]
不落、香且久、三葉者其花次日即落、但不能度山嶺、度嶺次
年不花、三年萎矣、

（按 魚子蘭ハ 金粟蘭（チャラン）ナリ）

東京大学総合図書館

（陸次官）

田中芳男殿

執事御中

挿入資料　東京大学総合図書館

東京市赤阪區赤阪溜池町

大日本農會

電話新橋六十七番

挿入資料 東京大学総合図書館

書啓

時下益御清祥被為渉
奉敬賀候陳者貴台
御肖像を本館発行ニ
太陽誌上ニ掲載仕り
度候ニ付御写真壱葉頂戴
之儀御願申上候處早速
被差下候得ハ直ニ當館員
猶右写真御返附申上候
此段得貴意候也

九月三日

博文館編輯局

田中芳男殿

御侍史

博文館編輯局

樹蘭

烏龍茶ニ香氣ヲ添ヘン爲メニ用ユ 花一ナルモノ曰ク茶新花 曰ク四英花 曰ク黄枝花 曰ク樹蘭花 昔ニテ樹蘭花ハ其ノナリ

樹蘭ハ常緑木ニテ從來琉球ニテ之ヲ木蘭トナヅク 先年香港ヨリ舶載シ傳ヘタリ 香蘭ト呼ブ 洋名 *Aglaia odorata, Lour.*

英華字典ニハ 三葉蘭ト五葉蘭ノ二種アリト載ス 琉球ノ名ハ三葉蘭ノ方ナリ 香港ヨリ傳ヘシハ五葉蘭ノ方ナリ

嶺南雑記曰 樹蘭高丈餘、花似魚子蘭而香烈過之、五葉者貴其花不落 香且久、三葉者其花次日即落、但不能度嶺、度嶺次年不花、三年萎矣、

（按 魚子蘭ハ 金粟蘭ナルベシ）

秦椒子、黒胡麻、青ノリ

右五葉ノ花ヲ一柄上ニ五葉ヲ着ク 三葉春ノ一柄上ニ三葉ヲ着クル
モノナリ 花ヲ摘ミタレテ形小シ 三葉ノ花ハ白色ナレ氏 五葉春ノ黄色ナリ
五雄蕊一雌蕊アリ 楝科ニ属ス
烏飯草ハ是ヲ花ヲ支那人ニ於テ 初摘ノ葉ハ良香ヲ発スレ氏
二番三番ノ茶葉ハ香気ヲ発スルカ多キヲ以テ 香気ノ茶ヲ
支那人ニテハ或人アリ
洪橋ハ周ニテ蘭ノ根部ヲ用ヰテ其外ニ於テハ其香気ニ乏シ 余ハ之ヲ
独木蘭、玉蘭、林蘭ニ於テ之ヲ知ル
(右ハ峯勝吉氏倫敦ヨリ枝ヲ携帰リシモノ 記スル所ニ因ル)
明治三十三年四月六日 田中芳男記

大日本農会報 五月十七日

ユリワサビ

明治三十三年四月廿四日竹内卯兵衛ノ村ニ於テ農民某ノ家ニ生スル
帰途 武州秩父郡大宮村ニ到ル時ニ山地ヨリ採来ル ワサビ 山葵ノ
葉ノミヲ採取シ根部ハ皆無棄セントスル人アリ是ナリ其根部ハ
ノ如ク異ナリ其ハ尋常ノ山葵ニ非ズシテ ユリワサビ 百合山葵ト
称スヘキモノニシテ或ハ秩父山葵ト云フナリト紀ス 無論二男ノ人テハスラ
当局ノ或ル本日到ル所ノ竹井氏之植ヘタル余ハ之ヲ携ヘ東
京ニ帰リ吟味シ又同志者ニモ分チタリ 本年十月又其
専用ノ人ニヨリ荒木氏ニ依頼シ満入ヲ寄贈セシメタリ
ツナス 圃ハ土壌ノ容易ニ生シ カヌノ衛ノ 三月

東京大学総合図書館

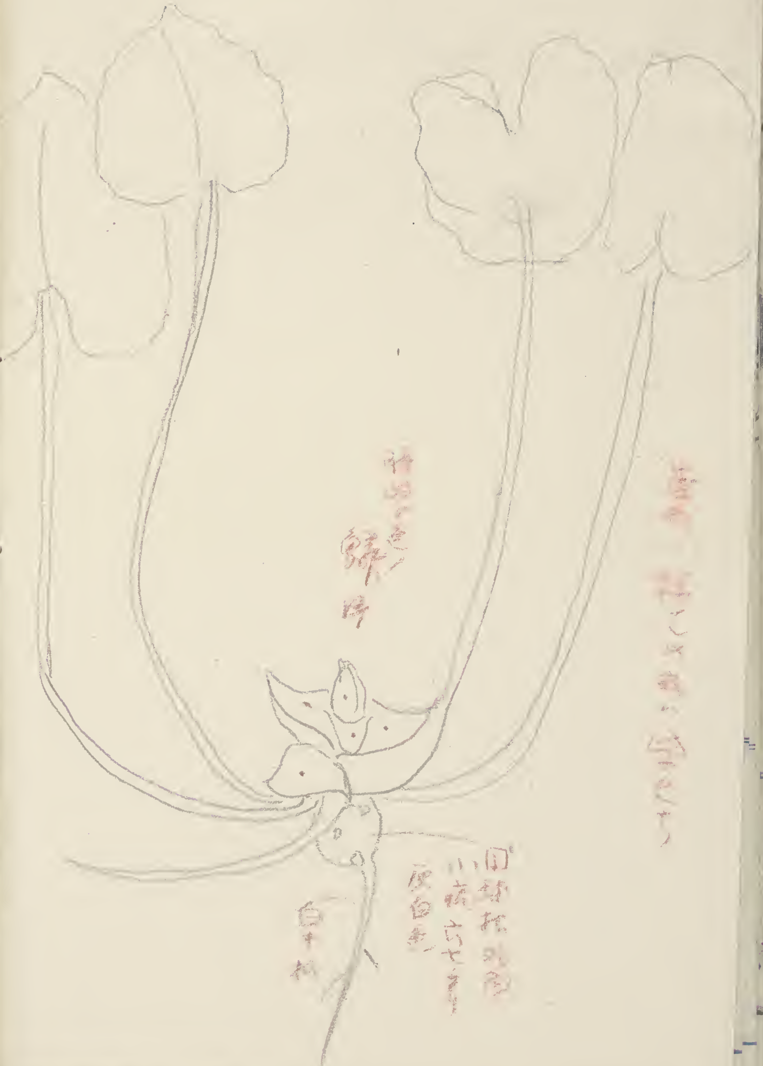
春寒徴豊稔

明治廿七年一月田中芳男題

中旬ニ至リ採集シ送附アリ（白井柏崎德右衛門）之ヲ検スルニ抑百合山葵ノ根
ノ形ハ尋常山葵ノ如ク長形ヲナサズシテ百合ノ如クナリ但シ
百合トハ云ヘ巻丹（オニユリ）ノ珠（カカゴ）子ニ似タリトモ云フベシ大サハ径一寸
許四五片互ニ抱キ末ハ胡蘆ヲ成ス（厚キ肉）内部緑色外面暗
紫色ナリ小ナルハ二三分許葉ノ其髪根ノ下ヨリ出ルモ大サ大ナル
ハ葉ノ鉢状ノ先ヨリ出ル即葉柄ノ根中ガ鉢状ヲ成セリ
小球ヲ多ク見ルハ紫色ノモノハ外紫色ナラザルモノアリ葉ハ尋
常ナルニ似テ小シ小ナルモノハ卵形ノ鈍鋸刻アルモ大ナルモノハ扁円形ニシテ鋭鋸
刻アルノミ但小葉ナルモ扁円形ナルモアリ葉形一定セザルガ如シ花ハ三月咲ク
開ク茎倒シ小蕾白色ヲ開ク山葵ニ似テ既少シスジニ比スルニ似タリト思フ今モ

百合山葵（ユリワサビ）

此草ハ山葵ノ一種ニシテ根ノ形百合ニ似タルヲ以テ名ツク 他国ニモ[illegible] 丹後国與謝郡蒲ノ村ノ山ニハ多ク生ズルモノニシテ 其葉ハ尋常山葵ニ似テ小ナリ 花モ亦[illegible]ニ似テ小ク且其葉[...]ニ 根ハ四五ノ鱗片ニテ成ル百合ノ根ニ似タル所アリ 卷丹ノ寒鶏子ニ似タリトモ云フベシ 其色ハ暗紫色ニシテ内質ノ辛味ナシ 山葵ノ根ニ似タリ 但シ根ノ如ク苦味ヲ帯ブ[...] 又其大サハ子許ニ達スルヲ最大トシ 大ヨリ以下ノモノヲ多シトス 小ナルハ其色暗紫[...] 緑ノモノ多シ 余ガ此草ヲ始メテ



同地ニ見ルハ去ル明治三十三年四月小笠原母島沖村ニ來テ其後母島ニ於テ志賀氏ノ該地ニ在リシ中ニ在リタル根ヲ得タリテ自ラ東京ヘ携帯シ一分ハ宮澤氏ニ寄贈シ氏ノ栽培ノ箱中ニ植ヘ今年又必用アリ荒木氏ノ經營ニ係ル蒲入村梅崎氏ノ[illegible]内氏ニ依頼シテ多数ヲ得タリ 要スルニ其事ハ山葵ト同シ[illegible]アラス以テ從ニ出タル田ヨリ慈ニテ専ラ宗ヨリノ性効栽培スルヲ得ハ一層ノ便アラン況ンヤ此ノ研究ヲ待ツ

明治三十三年十一月二日

田中[illegible]記

右頭書ノ如ク[illegible]

○成木番椒　小笠原島産ノ寫生圖ヲ見ルニ其實ハ天ヲ向ヒテ結着ス池田謙藏君ニ質スモ小笠原島ノモノハ天ヲ向ヒテ實ヲ着ルト也○臺灣産成木ノ番椒ヲ三田育種場ニテ鉢栽セルヲ以テ實検セントテ出向タルニ枯衰シタルニ因リテ已ニ小枝ヲ盡ク剪リ去リタルヲ以テ實検スルヲ得サリシヲ以テ結實ノ状樣ヲ聞キタルニ小實ニシテ下向シテ結着セリト云フ又當下田代安定氏出京セラレ居ルヲ以テ其辺ノ事ヲ承リタルニ臺灣ノモノハ下向ニ結着スト也然レトモ未タ細密ノ説ヲ得ス

大日本農會

東京大学総合図書館

三十年一月廿六日　農學汲田石平

葱の効能

葱は一般世人の常に食用に供する野菜で肉類に殆ど附物のやうになつて居る殊に洋風の料理には必ず葱を見ない事はない程であるが此葱は実に非常な滋養分に富み着しく衛生的成分を含んで居るもので就中之を生のまゝで食すれば其効能は驚くべきものである總て一般に生葱を常食とするものは此葱が皮膚の生理作用を十分よくするからして常に美はしい顔色をして居るそれから葱は血液の循環を速め神経を和げ鎮める又餘計の汗を身體から発散せしめて感冒を豫防し悪寒しに抵抗する若し夜る眠る前に葱を食べると翌朝目の醒

めた時に頭が明晰である胃の強壮剤、消化の催進剤
として是又他に匹敵するものがない少しくこれをい
ちれば直に目に涙を出さすると同様に其道去
する液汁は忽ち胃中の食物を侵して消化
作用を起すものである
生葱を日々定規に食すれば気管支炎や其他種
々の咽喉の病患を治療する然かも一の最良の治療
法である之を薄く切つて酢の中に浸し室内に放
置して朝晩に之を取換へればこれが又病室の一種
の最簡最良の消毒法となるのである
実に生葱ほど気力を持續せしめ又活氣を生ずる
性質を有つて居る野菜は他にない

西班牙人、葡萄牙人、伊太利人、等の労働者は一日働
き通して葱とアカナスと麺麭とを食するのみである
多くの野菜は皆血液を冷すが之に反して獨り生の葱
は最も寒き冬の日にも全身を暖める者である実
験談によれば其消化を助くる力は非常なもので
一度咀嚼されれば生葱が胃中に入ると忽ち消化液
を胃の全部に流布せしめるので冷めたい食物と
一緒に食すると胃液が甚しい流動を起して直に其
食物をペプトンで蔽ふのは事実であるさうな
猶又生葱と澱粉質の食物とを一緒に食へれば
澱粉質のものは唾液の中にあるピタリンと云ふ者の
働きで糖分を変ずる譯なので

葱を咀嚼すれば忽ち夫が唾腺を促して唾液を分泌する而して分泌した唾液は直に澱粉を糖分に変らしめて容易に吸収の出来る様にするのであるが其働は実に著しい其他生葱は特効のある鎮経剤であるこれを定規に常食すれは音聲を良くし強めるが之は世人の能く知て居る事実であるさてこれ等は生の葱のことであるが料理をしたのは如何かと云ふにこれは食物としては滋養分に富み有用なものであるが併し料理をすれば最早生の時の様な効能はなくなるものであるからして生の侭食べるのがよいのであるたが誰しも其臭気の甚しく不快なのに

閉口するしかし夫れは初めの内の事で漸次慣れゝば嫌がりどころか大の好物となるさうである支那人印度人などの例を見ればさうかと思へるこれにつけの薬味などには知らず識らず生で食して居るのであるから少しく澤山でも酢なでてやればよいかも知れぬ猶普通のよりも玉葱即ち西洋葱の方が此等の成分を澤山に含んで居るのである抑も此の臭気は何に基くかと云ふに夫れは葱の内には少量の硫黄を含んで居つて此硫黄を含んだ揮発性の油が水素と合して発散するからなのである、で此の揮発油は甚しい刺撃性を帯びて居るから新しい葱をいぢいて居ると妙な

東京大学総合図書館

目を刺撃されて涙をこぼすこれは臺所方で
で女共がよくやる滑稽劇であるこれを避るの
には生の甘藷、馬鈴薯などの片で葱をきる庖
刀の方より小刀なりを擦て置くのに限る

三十八年十一月　浦安広町（?）

（花菜）上　傳信

南葛飾郡高砂村大字齋藤（?）
山口安平

一、東京市興農園ヨリ買入種子ニ花野菜ハ
西洋ヨリ近口渡来シ序ニ播種シ四五葉ヲ蒔キタル
件之ナ定法ニ移植ス
一、土質ハ粘質壌土ヲ撰ミ
數布シ壟間ヲ尺五寸トシ株間ヲ尺トシ
壟上ヲ七ニク凹トナシ之ニ廾量ノ肥ト堆肥ト混
合シタル諸ヲ耕キ然ル上ニ移植ス又時ニ水肥ヲ施
シ其后數回植替ヘ叢康ヲ流肥トナス如モ

甘番椒

明治十九年十月初 宮崎県下ヨリ得ヘシノ
此種子ハ 興農園ヘ分配ス

夏時ハ病ハ害ニ害虫（害虫）ナシ殆リ灌水ヨリ引ト
漸リ十二月室ノ花球ヨリ抽出ニ一月初旬ヨリ
採収ニ着手セシカ二月末カ偶〃暖気ニテ開
花ヲ始メタリ依テ大概採収ニ同シ成丘スル
若ハ宜ニ個ト開花ニタル者七八ヵ卜ノミ直段
ニ至ハ甚廉時最近ノ市場ヘ販売ニタルモ相
場出候ナルカニテ五六償雑ニ値頗頗気
ニ係テハ前掲頗ル也

右之通ニ御座候也

明治二十年二月廿九日 井村芳次郎氏ヨリ傳 田中芳男

老薑根

肥大ナル断面手ノ如状

平面

側面

平面

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館